

連載 40 『妻よ薔薇のやうに』（1935 年） 成瀬巳喜男監督生誕 120 年記念の年に

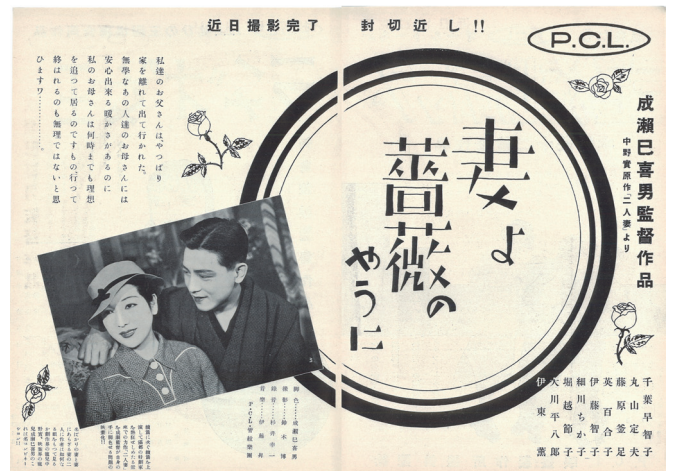
成瀬巳喜男監督は 2025 年 8 月 20 日に、120 回目の誕生日を迎えた。筆者はその前日、某所にて「アダプテーションで読む／観る『浮雲』 貫戦期の植民地主義とメロドラマ」というタイトルで講演をした。打ち上げでは盛りあがって「成瀬監督、お誕生日おめでとうございます！」と乾杯。記念にこの連載でも、成瀬監督『妻よ薔薇のやうに』をとりあげようと思う。1935 年度の『キネマ旬報』ベストワンを獲得した佳作である。

長年別居して、別宅には二人の子どももいるというのに別れずにいる夫婦（丸山定夫・伊藤智子）。原作は中野実が新生新派のために書いた『二人妻』だが、映画ではファッショナブルなモダンガールの娘・君子（千葉早智子）の視点から描いて、からりと物語が展開する。娘の婚約者（大川平八郎）は、口笛で「私の青空」を吹きながら登場するモダンボーイである。当時の映画広告は「近代娘の結婚に対する新らしいモラル」を謳い文句にしている。

成瀬巳喜男監督は前年の 1934 年に P.C.L.（現・東宝）に引き抜かれてトーキーを手掛け始めた。移籍直後の「成瀬巳喜男座談会」（『キネマ旬報』1934 年 9 月 21 日）では「今サイレントとトオキイと、どっちを採るか」と云へば、トオキイを採ります。蒲田に居るといつトオキイが撮れるのか分からないので非常に寂しかった」と発言している。



『ユリイカ』（2025 年 7 月号）

『妻よ薔薇のやうに』の千葉早智子（左）と大川平八郎（右）
『キネマ旬報』1935 年 6 月 11 日号所載

『妻よ薔薇のやうに』は成瀬監督のトーキー 3 作目である。「各俳優の性格が台詞によって、遺憾無く説明された。就中主要人物の性格は徹底的に描写されたのである」（鈴木吉之助『映画製作企画の実際』映画評論社出版部、1935 年）と、トーキーのお手本のように高く評価された。

音はいきいきしている。それだけではなく、本作は都市空間の切り取り方がモダンで、千葉早智子と大川平八郎の抜きつ抜かれつ戯れるような横並びの散歩風景などにユーモアがにじむ。君子が両親を劇場に誘うシークエンスがあり、オーケストラで「鏡獅子」を踊るというレビューが上演されていたので、もしやと調べたところ、1935 年 2 月東京宝塚劇場の星組公演で水田茂演出「鏡獅子」がかかっている。とすれば毛振りをしていたのは当時舞踊専科の天津乙女であろう。トーキーの醍醐味とも言える。貴重な映像である。

さて、君子は話をつけようと妾宅に乗り込むが、元芸者の妾（英百合子）は髪結いをし、実の娘を女学校にもあげずに働かせて、父の名義で送金を続けていたということがわかる。自分の学費も彼女たちの細々とした稼ぎから出ていたことを知り、君子は両親に離婚を勧める。実母の負けを認める、という形である。

中野実の原作では、父が別の家庭を持っていたのは海の向こうの満洲という設定だった。満洲事変が 1931 年、満洲国建国が 1932 年なので、時局的な設定でもあった。映画『妻よ薔薇のやうに』では、これが

信州という設定で、鄙^{ひな}びた風情が、東京の都市空間と対照をなしている。

岸松雄「成瀬巳喜男論」（『キネマ旬報』1936年12月1日号）によれば、「このごろの読者寄書欄で最も多く論じられてゐる映画作家は、成瀬巳喜男である」とのことで、『妻よ薔薇のやうに』、タイトルだけはなぜか内容にそぐわず、いただけないのだけれど、見どころ聞きどころの多い作品となっている。